

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Comparative Analyses : Results : Fishing 1200

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋道, 智彌 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003685

漁 撈 1200

秋 道 智 彌*

- | | |
|------------|---------|
| 1. 陸水から海へ | 3. おわりに |
| 2. 漁撈技術の類型 | |

1. 陸水から海へ

東南アジア、オセアニアにひろがる地域環境は、ごく大ざっぱに陸水（淡水の河川・湖沼）の卓越する東南アジアと海洋によってかこまれたオセアニアに区分することができる。しかし、東南アジアの島嶼部からニューギニア、オーストラリアにかけての地域では、海洋とともに内陸河川や湖沼などの陸水が発達している。これにたいし、ニューギニア以北・以東のオセアニア（メラネシア、ポリネシア、ミクロネシア）地域では、陸水はあまり発達しておらず、海洋的性格が強いとおもわれる。こうした点から陸水の卓越する東南アジア大陸部、陸水と海水の両要素をもつ東南アジア島嶼部とニューギニア・オーストラリア、ニューギニア・オーストラリアをのぞいたオセアニアという三つの領域にわけて東南アジア・オセアニア地域をとらえることにしよう。

この区分を前提として漁撈にかかわる12項目の分布をそれぞれ検討すると、Ⅰ. 東南アジア・オセアニアにまたがる広領域型、Ⅱ. 上記のいずれか2領域に分布する型、Ⅲ. 分布が3領域のいずれかにかぎられる型にわけることができる。以下、Ⅰ., Ⅱ., Ⅲ. の区分にしたがって、個々の漁撈技術を検討してみることになろう。

2. 漁撈技術の類型

1) Ⅰ. 広領域型

東南アジアからオセアニアにかけてひろく分布する漁撈技術として筌（112）、単式釣りばり（96）、魚毒（106）、やす（94）、松明漁（53）、四つ手網（29）をあげること

* 国立民族学博物館第1研究部

ができる（カッコ内は使用民族数を示す）。このうち、筥、単式釣りばり、やすはいずれも報告例が90を越えており、漁法としても、もっとも基本的な部類に属するものである。しかし、だからといって、東南アジアからオセアニアの全域で、おなじような形態で対象生物も共通した漁具がみとめられるのかというわけではなくてそうではない。たとえば筥と総称される定置漁具であっても、その形態や使用方法は多岐にわたる。アネル (Anell, B.) は、材質が棘をもつ小型の筥が、ニューギニアの内水面や北部島嶼部で特異的に分布することを指摘している [ANELL 1956]。筆者もミクロネシアを中心とした地域における筥を四つの類型に分け、それぞれの種類ごとに分布や系譜、対象魚種などが異なることを指摘した [秋道 1989]。単式釣りばりにしても、オセアニアでは考古学的発掘にもとづく詳細な編年・分布研究がなされている。

魚毒は、予想以上にひろい範囲でもちいられていることがあきらかになった。もちろん毒の材料となる植物は、東南アジアの大陸部と島嶼部、そしてオセアニアの島じまとは同一ではない。東南アジア島嶼部では、とくに *Tuba* と総称される魚毒用植物（たとえば *Dioscorea* sp., *Derris* sp.）がしられているし、オセアニアでは、*Derris* sp. とともに海岸部に多くみられるゴバンノアシ (*Barringtonia asiatica*) が一般的である。魚毒用植物自体の多様性ととともに、それらが在来種であるのか、あるいは移入種であるのかといった研究は、民族植物学のテーマとしても今後すすめられるべきだろう。

松明漁と四つ手網漁は、内陸河川・湖沼、ないしサンゴ礁の浅瀬でおこなわれる漁法である。東南アジアでは目立って多いわけではないが、オセアニア全域で松明漁、すなわち夜間の漁が非常にひろい範囲にわたりもちいられていることは注目しておいてよいだろう。これにたいし、四つ手網はハワイ、ポナペと、メラネシアから西ポリネシアにみられるが、松明漁ほどひろく分布するわけではない。一方、東南アジアではむしろひろくもちいられる。柴漬漁 (1216) について、大陸部からの報告はないが、内陸河川でもおこなわれている可能性がある。

広領域型の分布について、漁具の基本型であるからさして地域性もないと考えがちであるが、上にみたようにさらにくわしく検討すべき点が個別研究としてのこされている。そして、広領域型にふくまれる漁具の形態や材質が、淡水域と海水域でどのようにちがうのかを追究する必要がある。

2) II. 2 領域型

2 領域にまたがるものは、さらに II a. 東南アジア大陸部と東南アジア島嶼部・ニ

ューギニア・オーストラリア, II b. 東南アジア島嶼部・ニューギニア・オーストラリアと東オセアニア, II c. 東南アジア大陸部と東オセアニアの三つに区分できる。

II a. これに該当するのは, 水田漁撈 (1218) のみである。当然のことながら, II a. の地域区分と水田耕作の分布は一致しない。

II b. このなかにふくまれるのは, 漁撈用弓矢 (1201), 潜水漁撈・採集 (1219), 鰯揚げ漁 (1211) である。弓矢が, 狩猟用とともに水中の魚をとるために使われることは容易に考えられる。げんに, 狩猟用弓矢と漁撈用弓矢をあわせもつ民族例は多く, 例外とでもいえるのは, Rennell, Tikopia, Marquesas, Ellice, Kapingamarangi などのポリネシアの島じまで, こうした島じまでは狩猟用に弓矢はもちいられない。鰯揚げ漁については, アネルのくわしい研究があり [前掲 1956], シンガポール以東の分布がたしかめられている。潜水漁は, 東南アジア島嶼部にもあるが, やはり分布の中心はオセアニアである。ただし, 報告例が予想よりすくない。あまりに一般的なもので記載がなされていないのだろうか。さらに, もり (1203) については若干, 分布上のバラツキや例外があるとはいえ, アンダマン諸島からポリネシアにかけて点在する。もり漁は, Andaman Islanders やオーストラリア・アボリジニのように採集・狩猟民の道具としてもちいられる場合とそのほかの農耕民による例とでは, もり漁の系譜上, 異なる可能性があることを指摘しておこう。オセアニア地域においては, 捕鯨やワニ漁のために, もりが農耕民社会に導入された点も考慮すべきであるからだ。

II c. この型にぴったりとあてはまる漁法は, じつのところない。石干見 (1209), えり (1210) といった大型の定置漁具の分布が, オセアニアと東南アジア大陸部にかたよっているようにみうけられる。ただし, これらのいずれも東南アジアの島嶼部で分布することがわかっており, むしろ, I. 広領域型にふくめるべきかもしれない。

3) III. 地域型

地域型とよばれるものは, さらに III a. 東南アジア大陸部, III b. 東南アジア島嶼部からニューギニア, オーストラリア, III c. 東オセアニアのいずれかに分布のかたよりがみられるという三つの類型に区分できる。

III a. これにあてはまるのは, 鵜飼漁 (1214) である。例数がすくないとはいえ, この漁法が大陸部に限定される (ポリネシアの例はミスではないか?) として, もうすこし民族事例があってしかるべきである。

III b. これには漂海民 (1220) があてはまる。現在では, 漂海民とよばれた人びとの定着化がすすんでおり, 分布の特徴にはその点があらわれていない。泥ぞり (1217)

はⅢb. に該当する分布をしめすが、泥ぞり自体、大陸部の海岸部にもみられる〔西村 1975〕。

Ⅲc. この型にあてはまるのは、擬餌ばり(1208)と複式釣りばり(1207)、サメ漁(1215)であろう。2種類の釣りばりの場合、分布の上では例外とおもわれる民族が東南アジアにみられるが、いわゆるカツオ釣り用の擬餌ばりや結合式の釣りばりは、オセアニアで発展したものである〔REINMAN 1967; 1970〕。サメ漁についても、オセアニアにひろく分布する。ただし、サメ漁のなかには、海域だけでなく、淡水域においてもおこなわれる例があることに注意しておこう。

3. お わ り に

Ⅰ.～Ⅲ.の類型にもとづいて、東南アジア・オセアニアにおける漁撈技術の分布を検討した。その結果、淡水域のみでおこなわれる鵜飼漁、水田漁撈、淡水域と海水域の両方の水域でおこなわれる笠漁、魚毒漁、さらに海水域に特徴的な擬餌ばり漁やもり漁など、当該の地域で漁撈技術が多様に展開していることがあきらかになった。

泥ぞりのように、干潟環境を利用した漁法は、いわば生態学的な環境の分布に対応した分布をもつ。これにたいし、魚毒、笠の場合は、水田・河川・湖沼から、汽水域、サンゴ礁の浅瀬といったように、生態学的環境が異なるにもかかわらず、むしろそれに応じた形態・材質・漁法などが適切に考案された例である。両者を比較すると、環境に対する適応としての技術のもつ意味が異なっている。こうした点で広領域に分布する漁具・漁法と、分布が非常にかぎられる漁具・漁法の区別があることを銘記しておく必要がある。

すでに、漁撈技術の分布を漁撈文化圏といった枠組みでとらえようとする試みが藪内らによってなされている〔藪内 1978〕。こうした成果の上にたって今後、東南アジア・オセアニアにおける漁撈文化の比較研究がすすめられるべきだろう。